2026年日本OECD共同研究月間

「過去を超え、常識を超え、国境を超え、2040年の日本を教育からデザインする」

実施概要書

2026年日本OECD共同研究月間のテーマは「過去を超え、常識を超え、国境を超え、**2040**年の日本を教育からデザインする」です。人口減少、高齢化、分断、気候変動、生成AI含めたテクノロジーの急進に直面し、日本の教育が、社会の遅れを埋めるための制度ではなく、社会を先に更新するための装置として、2040年の日本を形づくる新しい教育の役割を共創パートナー、参加者と共に描きました。

■行事の期間：2026年1月16日～3月31日

■主催：東京学芸大学、経済協力開発機構（OECD）の共同開催

■後援：文部科学省（2026年1月30日～3月31日）、こども家庭庁（2026年2月9日～3月31日）
外務省（3/2-3/6Emergency Relief Club＠能登、 3/11ワークショップ、3/29クロージングワークショップ）

■開催規模：

期間中13個のワークショップが開催され、延べ1366名の方々が、ご参加くださいました。各ワークショップの参加者数は、別紙の表に記載しています。

参加者属性内訳：小学生90名、中高生236名、大学・大学院生81名、教師490名、研究者・行政や企業等関係者469名

参加地域（国内）：北海道、福島県、栃木県、新潟県、埼玉県、東京都、神奈川県、石川県、福井県、静岡県、大阪府、和歌山県、兵庫県、広島県、島根県、山口県、福岡県、香川県、徳島県、佐賀県、熊本県など

参加地域（海外）：ドイツ（日本語補習校教師）、フランス（OECD　Education2040関係者、OECD日本政府代表部、現地校日本セクション教師）、ルーマニア（教師・生徒）、カナダ（名誉校長）

■主な成果（ハイライト）：「過去を超え、常識を超え、国境を超え、2040年の日本を教育からデザインする」をテーマに開催した13のワークショップの主な成果は下記のとおり。

(1)命を守る教育

- 1/16に開催されたキックオフワークショップでは、「もし、南海トラフが起きたら？」という問いに、輪島高校・飯田高校の生徒教師が、能登半島地震被災地の実体験に基づく声で届けました。OECD教育スキル局アンドレアス・シュライヒャー局長からは、「災害直後には学校がコミュニティの中心になることも多く、また安心・安全は、生徒たちがどう感じるかによるものであり、平時においても、belonging（つながり）が大事なのではないか」とコメントが出されました。

- 非常事態は、災害だけでなく、こどもの自殺なども増えており日常的にあることは、3/28にクロージングワークショップでも、報告されました。今回のワークショップでは、生徒のいのちを真ん中に据えた教育を、教師だけに押し付けるのではなく、生態系全体で、教師を守ることが求められていること。またウクライナの事例（シェルターでも安心・安全に感じるの学校づくり）から、教師の役割の本質を考えたことが、報告されました。姫路市が実施している活動（教師の被災地への派遣等の復興支援）の場合、被災地に赴いた教師のセルフケアが、システムとして取り入れられている。一方で、非常事態は日常的に常態化しており、バーンアウトする教師や、教師をめざす学生のボランティア活動など、セルフケアに関しては、

まだ守られていない部分も多く、専門家の長期のフォローも含めて、みんなでシステムとして考えていきたいと、話し合われました。

- 3/11に開催された「3.11に考える「恩送り」とは：阪神淡路、東北、熊本、能登がつなぐ災害の学び」では、被災した4地域からの登壇者を迎え、過去(災害発生時の体験）、現在（過去の災害時の経験を受けて、それまで当たり前だと思っていたことや、行動、考え方の変化） 未来（2040年に南海トラフ地震が発生した場合を想定して何ができるか）について発表。被災した能登の生徒からは、世界や他地域を見ることで、与えられるだでなく、自分も貢献できる人間になりたいと思った。災害した地域にとどまりたい、戻りたい、と思える場所にしていきたい。と想いを語ってくれました。参加者からは、地域を超えて、時間を超えて、つながり、学びあうことができたという声をいただいています。

(2)教えるから、一緒にワクワク楽しむ教育へ

- 1/23に小津中学校で保護者や地域の関係者と一緒に開催された、「小津中での、おさんぽメガネワークショップ」は、生徒たちから「教科書は脳に書き込むだけだけど、五感を使うと納得感が違う」という言葉も出され、身体性を伴う学びの価値を雄弁に物語っています。そして、さんぽを通して教科の見方・考え方を問い直すおさんぽメガネワークショップが、単なる「知識の注入」ではなく「納得感のある理解」に繋がったことが伺えました。そしてこれは、先生たちの「教えるから一緒にワクワク楽しむ、へのアンラーン」にもつながり、先生たちにとっても「既存の授業観」を揺さぶられる時間となりました。大人側の振り返りでは、生徒の主体性を引き出すための「教師の在り方」に対する根源的な問い直しが行われた、と報告されています。（報告記事）

- 2/7から4回シリーズで開催された「Teaching Compass体感ワークショップ」では、職務的な役割を超えた人間としての「Anchor（軸）」が再発見されました。

- トルコから生徒・教師を招いて予定されていた「Emergency Relief Club＠能登」は、中東情勢の影響でトルコからの訪日はなくなりましたが、既に到着していたOECD関係者と日本のメンバーで内容を変更して実施しました。この際、輪島高校の校長から「通常の授業に戻すのではなく、この現実をネタに授業をつくってください」と参加者に依頼され、即興の教科横断型授業がデザインされました。わずか40分で、7教科の教員がそれぞれの専門性を活かした授業案を作成し、世界で起こっている事実を複数の「教科のメガネ」で捉える授業が構想されました。これこそが教師自身が探究し、その姿を生徒に見せ る「Being」の体現であり、トラブルを学びに変え、「現実が教科書になる」瞬間に立ち会えたことを、アンカーを降ろした教師たちがどのように「探究」を実践したかの象徴的な例として、OECD田熊氏から、3/7開催の「探究のアップデート『探究2.0』を共創しよう」の中でも、事例紹介がなされました。（「探究のアップデート「探究2.0」を共創しよう」の開催報告書 より引用）

- 3/7開催の探究のアップデート 「探究2.0」を共創しようでは、これまでの個やチーム内に閉じがちな探究から脱却し、多様性のある、他者に開かれた探究にするきっかけが得られた様子が見られました。

- 3/14に開催された第9回探究オリンピックあそび・まなびフェスタ2025でも、あそび感覚を取り入れつつ算数・数学のイメージアップデートを目指したワークショップが継続的に開催されています。

- 3/28の「クロージングワークショップ」では、おさんぽメガネの活動に伴走している研究者から、生徒たちがこれまでの授業で抱えたモヤモヤは、実社会と教科の乖離、テストのための勉強などがある。おさんぽメガネワークショップは、おさんぽという日常の活動から、教科の:見方・考え方を問い直す実践で、今後も広がっていってほしいと報告がなされました。

(3)未来の教師像

- 3/22開催の2040年を自分らしく歩む:セルフデザインで描く「未来の教師像」は、今の延長線上ではない「2040年の社会」を想像し、自分自身がどのような教師でありたいか、そのためにどんな学びが必要かを、対話を通じて考える、教員を目指す学生が中心となって開催されたワークショップです。参加者から

は、これからの教師に求められる役割や力への理解を深めた。変化の大きい社会において学び続ける姿勢や、学校の内外をつなぎながら教育を創っていく必要性について認識した、などのコメントが出され、対話と省察を往還することで、参加者が自身の将来像を具体的に描き、主体的にキャリアを捉える契機となりました。

- 3/28に開催された「教員による教員のための教員研修「元気玉イベント」～大人のための探究とTeacher Well-being～」は、継続的に開催している、教師が作る教師のための教員研修です。「探究的な教員研修」を通じた、教員のTeacher Well-beingの向上と行動変容。多様なステークホルダー（高校生、社会教育主事、NPO経験者など）の価値観やワクワクして活動する姿に触れ、教員自身がエネルギー（元気玉）を受け取り、自らの「Teaching Compass（コンパス）」を見つめ直しました。

- 3/28に開催された「世界の職員室ワークショップWorld Staffrooms Workshop」では、世界各国のFG2A（教師グループ）ともつなげ、あるべき職員室の物理的・精神的な要素を対話し、2040年に向けた世界の職員室をデザインしました。雑談や偶発的な対話が生まれる「職員室の余白」、失敗を許容し、弱さを開示できる職員室の文化（空気感）の醸成、社会との接続など、教育現場がどのように変容すべきか、様々な示唆が得られました。

(4)壁を超えた顔の見える関係・エコシステムで未来に挑む

- 2/14に開催された「第6回 津和野町保育展～未来を生きる子どもたちに今、できること～」では、保幼小連携の成功事例から、他の地域でも実現が可能か、という問い緒に対して、顔が見える関係が築ければ、保幼小の接続は、どの地域でも実施可能だと思う。と発表されました。参加者からは、「地域力」顔が見える関係性や「お互い様」の気持ちを大切にしたい。保育士だけが頑張るのではなく、地域全体でこどもと未来を考えていくことの必要性を、改めて感じた講演だった、などの声が報告されています。

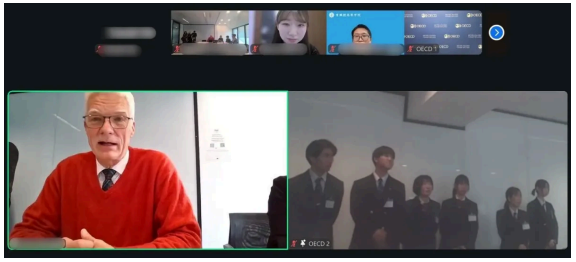
- 3/14　2040年の持続可能な居場所づくりの「もがき」と「ゆらぎ」では、高齢化や人口減少・人手不足などの問題も多い中、コミュニティ・スクールなどを通し地域での役割や居場所の創出、学校以外の立場の大人の参画、学校内での居場所づくりの取り組み、民主主義を根底に居場所を検討する必要や大人自身の価値観のアップデートの必要性、持続可能なプロボノによる居場所づくりの在り方などを模索しました。

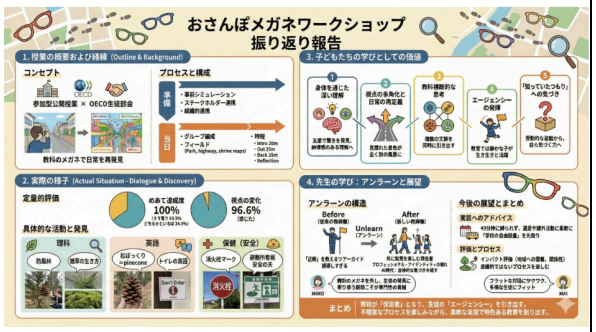
3/29に開催された「日本OECD共同研究月間クロージングワークショップ」の最後には、OECD日本政府代表部担当官から「現場での課題の共有など、現場レベルでのコラボレーションが進み、点と点がつながって、面にしていけることを応援していきたい」またOECD教育スキル局からは、「エージェンシーを『歴史を紡ぐ主体』と訳す国もある。より良い2040年に向けて、『歴史を紡ぐ主体』としての皆様と共創していきたい」と、今後に向けてのエールをいただき、2026年日本OECD共同研究が閉会しました。

各ワークショップの詳細は別紙1を参照ください。

別紙1：自律分散型で実施されたワークショップ

令和8年1月29日付け申請内容に、令和8年3月18日付け変更申請書の内容が反映されています。

日程	時間（日本時間）	名称（日本語）	実施内容	主な成果	開催形態	言語	主催・共創パートナー*	参考
1/16（金）	19:00～21:00	日本OECD共同研究月間キックオフ特別セッション	第1部：能登半島地震で被災した輪島高校、飯田高校の生徒、教師が、笹川日仏財団の助成を得て、フランス・パリを訪問。OECD本部訪問の機会をオンラインでつなぎ、実体験と未来の教育への声を、シュライヒャー局長とともに、パリから届けます。そして、危機における教育を参加者が対話します。 第2部：第一部を受けてOECD日本政府代表部を交え、国際的な視点と自身の立場を重ね合わせながら、参加者が問いを深めます。さらに実行委員会メンバーから、国際共創月間期間中に予定されている各種ワークショップを紹介します。 	能登半島地震の経験から「未来をより良くするためには何ができるか。」「もし、南海トラフが起きたら？」という問いについて、能登半島地震被災地の実体験に基づく声を、オンライン・ワークショップで届け、「未来を築く学び」とは何かを、広く参加者と共に考える場を共創しました。 教師からは、人口減少、学校の統廃合も進むであろう能登において、輪島・能登が「実験箱」として先行事例を作り、未来の社会づくりに貢献していきたい。 能登地域の学校が、各キャンパスのような形で連携していきたい。 生徒からは、珠洲の塩を使ったマカロンで地域を盛り上げたい、自分の家の寺を被災した人たちのコミュニティにしたい、など、発表。被災した体験をワクワクに変えることを体現した場になったとコメントもいただきました。 シュライヒャー局長からは、自然災害は制御できないが、未来を創れるのは人間であり、東北スクールから見てきた、被災した地域の生徒、教師の未来への想いに感銘を受けたとコメント いただきました。	オンライン	日本語（一部英語、ズームの通訳機能を利用）	石川県立輪島高等学校・ 石川県立飯田高等学校・ 2040年の日本と教育をデザインする国際共創プロジェクト実行委員会	記事

				参加者数：101名 （中高生8、大学生10、教師33、研究者・省庁・ 企業等50）				
1/23 (金)	13:05 ~ 15:10	小津中での、おさんぽメガネワークショップ	2023年12月、2024年3月、8月の能登スクール、12月プロジェクト国際サミット（パリ）、更に2025年3月に大阪でも開催してきた教科の見方・考え方を見直すWSを、今回は小津中学校で共創・実施しました。 国語、保体、社会、音楽、数学、英語など、多様な教科担当教員や指導主事、生徒部会メンバー、PTA実行委員が各グループに配置され、フィールドとして助松公園（防波堤跡、球場、ロケット公園など）、紀州街道（田中本陣、洋館）、助松神社、蓮生寺など、地域の歴史・文化資源を網羅したルートを設定しました。  	生徒たちの自由記述からは、本活動が単なる「知識の注入」ではなく「納得感のある理解」に繋がったことが伺えた。アンケートでは、生徒の100%が「教科のめがねをかけて考えを広げたり深めたりすることができた」と回答。「教科書は脳に書き込むだけだけど、五感を使うと納得感が違う」という言葉は、身体性を伴う学びの価値を雄弁に物語ってくれています。 先生たちの「アンラーン」：教えるから一緒にワクワク楽しむへ：このWSは、先生たちにとっても「既存の授業観」を揺さぶられる時間となりました。大人側の振り返りでは、生徒の主体性を引き出すための「教師の在り方」に対する根源的な問い直しが行われた、と報告されています。 参加者数：59名 （中高生38、大学生1、教師10、研究者・省庁・ 企業等10）	会場：泉大津市立小津中学校	日本語	泉大津市立小津中学校・OECD生徒部会日本支部（Flying pEnguins）	記事
2/7 (土) から 4回 開催	n/a	Teaching Compass体感ワークショップ ・2月7日(土) ・2月21日(土) ・3月7日(土) ・3月21日(土)	Teaching Compass読書会を継続的に開催してきたFG2A教師グループが、Teaching Compassの意義・背景を、海外関係者ともつないで改めて深堀りし、どのようにTeacher Well Beingを達成するのかを研修を通して考える。研修シリーズとして、2/7、2/21、3/7、3/21の実施を予定している。	本ワークショップは満足度が高く、参加者の期待値を超える成果を上げました（アンケートより）。参加者は対話による「喜怒哀楽」の深掘りと「弱さ」の開示を通じ、職務的な役割を超えた人間としての「Anchor（軸）」を再発見しました。 特に「弱さがつながりを生む」という実感が、孤独な個人から協働（Co-agency）への意識変容を促しました。理論と体感が融合し、2040年に向けた確かな「あり方（Being）」を獲得する場となりました。 のべ参加者数：81名 （大学生7、教師47、研究者・	オンライン	日本語（一部英語、ズームの通訳機能等を活用）	FG2A教師グループ	

				省庁・企業等27)				
2/14 (土)	13:00 ～ 17:00	第6回 津和野町保育展～未来を生きる子どもたちに今、できること～	人口約6、200人の島根県津和野町では、令和2年度から行政が幼児教育コーディネーターを配置し、コーディネーターが各保育園を訪問して課題を見出し、研修作りを行っている。毎年2月に実践発表会「保育展」を実施しており、今年は2040年を見据えて、保幼小の接続などを参加者と対話し、過疎化が進む地域の保育所、学校の姿を構想した。OECD教育スキル局田熊美保氏登壇（オンライン）	主催者からは、人と人の壁をとっぱらって、顔が見える関係が築ければ、保幼小の接続は、どの地域でも実施可能だと思う。0歳児からの学びの積み上げを、皆で支えていきたい。と報告 以下のような参加者の声（抜粋）も報告されています。 ・人口約6000人の津和野町は、これから各地で起こるであろう課題を先に経験している“過疎先進地”とも言えます。だからこそ、何を大切にし、何をなくしたくないのかを考える必要があると感じました。私が大切にしたいと感じたのは「地域力」でした。顔が見える関係性や「お互い様」の気持ち、自分の快・不快や信じるものを大切にすること。便利さや効率が進んでも、最後に人を支えるのは、人と人とのつながりなのではと感じました。未来を考えることは不安にもなりますが、今ここで何を大切にするかを考えるよい機会となりました。 ・最近「ウェルビーイング」や「エージェンシー」という言葉を耳にする機会が増えていますが、これは保育士だけではなく、子育て中の保護者や地域の方々、そして子どもたちに関わるすべての大人に、じわじわと“感染”していってほしい感覚だと思いました。保育士だけが頑張るのではなく、地域全体で子どもと未来を考えていくことの必要性を、改めて感じた講演でした。 参加者102名 （中高生1、教師10、研究者・省庁・企業等91)	対面：津和野体育館	日本語	津和野町健康福祉課	案内

3/2 (月) ～ 3/4 (水)	終日	Emergency Relief Club@能登	能登半島地震で被災した輪島高校が、さくらサイエンスプログラムの助成を得て、OECDが主催します Emergency Relief Club(ERC)のパートナーであるトルコの生徒・教師を日本・能登地域に招へいします。能登の学校や、能登地域以外の学校、関係者も参加して、「ものづくり」「サイエンス」「AI活用」に焦点をあて技術を使った防災や創造的復興についてアイディアを出し合います。また、この技術も活用のために、文理融合や高校のサイエンス教育改革について意見交換する予定でした。 しかし、イラン・中東情勢を受けて、トルコからの参加が不可能となり、OECD並びに日本側メンバーのみで、内容を変更して能登地域で下記の通り開催しました。 【3月2日】能登の中高生による復興推進(Treasure Hunt)プロジェクト:「地震からの復興にアプリ / AIなどの科学技術が貢献できることは？」をテーマに、MIT App Inventor財団も交えて、輪島高校生によるアプリの紹介プレゼンテーション、関係者からの評価やコメント、ラウンドテーブルディスカッションを実施 【3月3日】翌日の「おさんぽめがねWS」及び「想定外を考える会」のための準備 【3月4日】 （午前）おさんぽメガネWS 科学のメガネ（見方・考え方）でワークショップを実施し、日常(社会)を科学(理系科目)の視点で見ることでの気づきや学びはどんなものがあるか、文理融合の実践にチャレンジ （午後）「想定外を考える会」想定外の事態を自分事として考えるにはどうすればよいか、を対話。トルコにつ	輪島高校より報告： ・アプリ開発に関して、学校外の多様なメンバーの意見や評価を取り入れることで、輪島市民のみなさんに広く使ってもらえる最終的なアプリ開発に向けて、生徒たちのモチベーションがあがった ・おさんぽメガネでは、参加者自身が地域の価値を発見し言語化することができ、生徒が地域文化や地域社会の価値について主体的に考える姿が見られた ・これまでは一部の生徒のみがトルコの高校生と交流していたが、輪島高校学校全体でトルコの方と交流する意欲が高まった。学校外の方と、学校内の生徒や教員が、共に当事者意識と責任感を持って共創する意識が芽生えた 参加者201名 （中高生153、大学生2. 教師35、研究者・省庁・ 企業等11) （お寺でのおさんぽメガネWSの様子）	会場：輪島地区・輪島高校	日本語・英語	石川県立輪島高等学校・能登スクール実行委員会	

			いて理解を深め、次回の招聘に向けた継続的な交流案を考えた。 このトルコの事例（トラブルを学びに変える）は、3//7開催の「探究のアップデート「探究2.0」を 共創しよう」でも、田熊氏から輪島高校の「現実の教科化」として、事例紹介されました。」	 （おさんぽメガネ振り返り会の様子）				
3/7 (土)	15:00 ～ 17:00	探究のアップデート「探究2.0」を 共創しよう	高校探究プロジェクトでは、対話を起点に他者に開かれた探究へと転換する新たなアプローチを「探究　2.0」と位置づけ、その実践コミュニティを全国の高校生や先生方に広げるべく開催するワークショップ。「多様性」がキーワードとなる現代社会において、改めて“ 他者とともに学ぶ意味 ” を問い直します。OECD教育スキル局田熊美保氏を迎え「OECDティーチング・コンパスを紐解く」をテーマにご講演予定。「OECDティーチング・コンパス」を手がかりに、カリキュラムを「理念」から「実装」につなげていくために、これからの教師の姿などついて、考えます。 第２部 パネルディスカッション 	「探究のアップデート「探究2.0」を共創しよう」の開催報告書 より引用 アンカーを降ろした教師たちがどのように「探究」を実践したかの象徴的な例として、トルコから訪日予定だった一行 が、国際情勢の影響で急遽来られなくなった際、校長は通 常の授業に戻すのではなく、「この現実をネタに授業をつ　くってください」と教員に依頼されました。即興の教科横断型授業がデザインされ、わずか40分で、7教科の教員がそ　れぞれの専門性（数学：フェルミ推定、物理：ステルスの メカニズム、商業：株価への影響など）を活かした授業案　を作成し、世界で起こっている事実を複数の「教科のメガネ」で捉える授業が構想されました。これこそが教師自身が探究し、その姿を生徒に見せる「Being」の体現であり、「現実が教科書になる」瞬間に　立ち会えたと述べられました。 ワークショップ全体では、これまでの「正解を求める型」や「形式的な実績づく　り」としての探究から脱却するきっかけを得られた様子が 見られました。 参加した高校生からは「探究は答えを求めるものではなく、より良い　選択肢を考え続け、実生活を豊かな視点で見つめることだと気づいた」教員・研究者からは、「従来型の学びのメガネ」を外し、自分　を含め	オンライン	日本語	東京学芸大学高校探究プロジェクト	記事 報告書も掲載

				たあらゆる人々の学習観をアップデートする必要性を痛感した」という声が多く挙がっていました 本セミナーが単なるインプットの場ではなく、次なる「行動（Becoming）」への新たな起点となったと実感しています。 参加者307名 （中高生16、大学生15、教師203、研究者・省庁・ 企業等73)				
3/11 (水)	17:00 ～ 19:00	3.11に考える「恩送り」とは：阪神淡路、東北、熊本、能登がつなぐ災害の学び	日本OECD共同研究の起源であるOECD東北スクール卒業生や関係者、また阪神淡路、熊本、能登からも登壇者を交えて経験をつなぎながら、東日本大震災の発生した3月11日に、危機における教育を多様な参加者と対話し構想します。 4地域の登壇者から、過去(災害発生時の体験）、現在（過去の災害時の経験を受けて、それまで当たり前だと思っていたことや、行動、考え方の変化） 未来（2040年に南海トラフ地震なども想定して、あの時こうしていればよかったと思う事、また自分の立場から何ができるか）、について発表の後、参加者は小グループで深堀対話を行い、最後に「2040年に○○を実現するために、今から△△を始めます」というテーマに自分の考えを描く作業を行いました。	登壇者からは、災害の経験から意識が変わったこととして、 個人の特性に合わせた教育が大事だと思った。産官学の連携の大切さを感じた。 与えられるだでなく、世界や他地域を見ることで、自分も貢献できる人間になりたいと思った。（生徒）などの声が届けられました。 未来に向けて取り組みたいことしては、学校支援のためにD-EST（被災地学び支援派遣等枠組み）など、教職員にできることはある。まだまだ広くD-ESTの周知はできれおらず、広く導入を目指したい。災害が起き、硬直した学校に風穴があいた。学校が地域の人々にとって柔軟に対応できるものにしていきたい。備える・振り返ることが大切だと思う。恩送りができる立場になるために、いろいろな地域とつながって、生徒と教師のエージェンシーを育てることが大切。 災害した地域にとどまりたい、戻りたい、と思える場所にしていきたい。 参加者からは、集団での避難など、東日本大震災での経験が能登震災でも生かされていた事例はあった。地域を超えて、時間を超えて、つながり、学びあうことができた 災害を単なる出来事としてではなく、自分事として捉え直すことができた。などの声が出されました。 参加者43名 （中高生3、大学生5、教師17、研究者・省庁・ 企業等18)	オンライン	日本語	2040年の日本と教育をデザインする国際共創プロジェクト実行委員会	

3/14 (土)	13:30 ～ 16:30	第9回 探究オリンピックあそび・まなびフェスタ 2025	あそび感覚を取り入れつつ 算数・数学のイメージをアップデート したいと考え活動している「さんすう数学あそび座」のワークショップです。	・小学生は、初めて会う仲間とのチーム活動に当初は不安な様子も見られましたが、次第に打ち解け、自分の考えを伝え合いながら協働して解法を導く姿へと変容しきました。活動の最後には、笑顔あふれる様子が見られ、充実した学びの時間となっていました。 ・保護者もチームを結成し、子どもたちと同じ課題に向き合いながら真剣に協議する様子が印象的でした。学校の授業とは異なる視点から「算数」を捉える機会となっていました。 ・中高生は展示ブースにおいて、小学生に対して丁寧に問いを投げかけたり支援したりする中で、表情や態度に変化が見られ、学びへの充実感や手応えがうかがえました。 参加者207名 (小学生90、中高生3、大学生6、教師8、研究者・省庁・ 企業等100)	会場：広尾学園小石川中学校・高等学校	日本語	主催：特定非営利法人学校支援協議会 共催：日本OECD共同研究 国際共創プロジェクト 壁のないあそび場ーbAー さんすう数学あそび座 協賛：栄光ゼミナール SAPIX 早稲田アカデミー	告知
3/14 (土)	19:00 ～ 21:30	2040年の持続可能な居場所づくりの「もがき」と「ゆらぎ」	こどもや若者の不安や孤立が社会で拡大する中、こどもの声をもとにこどもに必要な「安心・安全」な環境を考え、居場所の運営から未来の居場所を考えていきます。	2040に向けた持続可能な居場所づくりについて登壇者の発表、意見交換、有識者や政府関係者、OECDからのコメントを含めながら検討を行いました。高齢化や人口減少・人手不足などの問題も多い中、コミュニティ・スクールなどを通し地域での役割や居場所の創出、学校以外の立場の大人の参画、学校内での居場所づくりの取り組み、民主主義を根底に居場所を検討する必要や大人自身の価値観のアップデートの必要性、持続可能なプロボノによる居場所づくりの在り方など今後、我が国が直面する様々な課題の中で「こどもまんなか」にした実践の必要とそのための実践などについても幅広く検討を図り、2040年に向けた課題と示唆を参加者と共有した。 参加者42名 (中高生8、大学生8、教師7、研究者・省庁・ 企業等19)	オンライン	日本語	日本OECD共同研究「壁のないあそび場」こども・若者の居場所づくり 座	

3/22 (日)	17:30 ～ 20:00	2040年を自分らしく歩む:セルフデザインで描く「未来の教師像」	今の延長線上ではない「2040年の社会」を想像し、自分自身がどのような教師でありたいか、そのためにどんな学びが必要かを対話を通じてアップデートします。教員を目指す学生が中心となり、未来の教育について本気で語り合うワークショップ	ワークショップを運営した将来教師を目指している学生からの報告です。本ワークショップは満足度が高く、参加者の期待を上回る成果が見られました（アンケートより）。 参加者は対話を通して2040年の教師の姿を多面的に捉え直すとともに、セルフデザインの観点から自身の在り方を見つめ直しました。特に、異なる立場や経験をもつ他者との意見交流が、新たな気づきや視野の広がりを生み、これからの教師に求められる役割や力への理解を深めました。また、変化の大きい社会において学び続ける姿勢や、学校の内外をつなぎながら教育を創っていく必要性について共通認識が形成されました。対話と省察を往還することで、参加者が自身の将来像を具体的に描き、主体的にキャリアを捉える契機となりました。 参加者20名 (大学生7、教師7、 研究者・省庁・ 企業等6)	オンライン	日本語	鳴門教育大学、FG2C*（教職志望学生グループ）	
3/28 (土)	9:00 ～ 10:30	教員による教員のための教員研修「元気玉イベント」～大人のための探究とTeacher Well-being～	「探究的な教員研修」を通じた、教員のTeacher Well-beingの向上と行動変容。多様なステークホルダー（高校生、社会教育主事、NPO経験者など）の価値観やワクワクして活動する姿に触れ、教員自身がエネルギー（元気玉）を受け取り、自らの「Teaching Compass（コンパス）」を見つめ直します	本イベントの成果は、多様な実践との出会いや対話を通して、参加者が自らの「内なるコンパス（元気玉）」を見つめ直し、その解像度を大きく高めたことです ・オランダでの教育視察では、当たり前が揺さぶられた追体験をし、発表者のオランダの教育から感じたことを熱量とともに聞いた。釧路の図書ボランティアのエピソードでは、図書ボランティアの人が自己有用感を感じ「元気玉」膨らませていく一人の人間の変容を感じることができた。発表者の「教師を超えることはできない」という言葉から教師という職業へのエールを強く感じた。岡山のユースセンターの取組では、高校生が居場所づくりに主体的に関わり、その中で経験した迷いや感動を聞くことができた。学校や世代を越えたつながりを感じることで、教師としての元気を取り戻すことができたと感じる。 ・その結果、「インドネシアとの国際探究」や「学校に	オンライン	日本語	日本OECD共同研究「壁のないあそび場」教員研修で『元気玉』を届けようプロジェクト座	

				通えていない子の居場所づくり」など、未来の教育を自ら創るための具体的な行動（エージェンシー）を表明してくれた参加者もいた。 参加者33 名　(中高生2、大学生5、教師23、研究者・省庁・ 企業等3)				
3/28 (土)	18:00 ～ 20:00	世界の職員室ワークショップ World Staffrooms Workshop	世界各国のFG2A（教師グループ）ともつなげ、あるべき職員室の物理的・精神的な要素を対話し、2040年に向けた世界の職員室 をデザインします。	本イベントでは、参加者の心の変容（内的変化）として、「2026年に向けて自分たちの手で職員室（文化）を書き換えることができる」という自己効力感の高まりが見られました。 ワークショップ後には、WhatsApp上に「Global Staff Room 2026」を立ち上げ、世界の教員のHome Port となるオンラインスペースを創出しています。 未来の変革に向け、教育現場がどのように変容すべきか、以下の3つの示唆が得られました。 ・「余白」をデザインする重要性:（雑談や偶発的な対話が生まれる「職員室の余白」が、教育の質と教員のメンタルヘルスを支える鍵となる） ・心理的安全性のインフラ化:（失敗を許容し、弱さを開示できる職員室の文化こそが、新しい教育手法に挑戦する土台となる。システムの変更以上に、文化（空気感）の醸成が最優先課題であること。） ・社会との接続（開かれた職員室）：職員室を学校内だけで完結させず、外部の人材や知見が日常的に流入する「ハブ」として機能させることが、教員の視野を広げ、結果として子供たちに多様な価値観を提示することに繋がること。 参加者28 名　(教師23、研究者・省庁・ 企業等5)	オンライン	日本語・英語	FG2A*教師グループ	

3/29 （日）	15:00 ～ 18:00	日本OECD共同研究月間クロージングワークショップ （グローバルフォーラム凱旋報告会・中間まとめ発表会を統合）	本事業は、2026年日本OECD共同研究月間のクロージング企画です。 第一部では、AI活用、防災教育、インクルーシブ教育、地域格差・少子高齢化など、多様なテーマで個別に行われてきた取り組みを統合し、共同研究月間の設計思想と全体像をダイジェスト形式で提示し、行政視点も交えて、課題と可能性を深掘りします。 第二部は、2025年11月にスロバキアがホストとして開催された「OECD Education2040 グローバル・フォーラム」（テーマ「AI時代に学び、何を考えるか（日本語仮訳）」に対面参加したメンバーが、内容をリレー報告で共有します。 そして、日本がOECDとどのように関わってきたのか、その歴史を振り返るとともに、今後の展望と可能性について提示し、次年度に向けた新たな共創の起点にします。 	第一部では、以下のような発表がなされました。 ・輪島・能登が「実験箱」として先行事例を作り、未来の社会づくりに貢献していきたい。国内外含めて多様な他者と関わる能登スクールを通して、人々がハッピーになれる、ワクワクする学校を作っていきたい。 非常事態は、災害だけでなく、子供の自殺なども増えており、日常的にある。生徒のいのちを真ん中に据えた教育を、教師だけに押し付けるのではなく、生態系全体で、教師を守ること、法整備も含めて、模索していきたい。ウクライナの事例から、先生の役割の本質を考えた。姫路市が実施している活動（教師の被災地への派遣等）復興支援の場合、被災地に赴いた教師のセルフケアが、システムとして取り入れられている。一方で、非常事態は日常的に常態化しており、バーンアウトする教師や、教師をめざす学生のボランティア活動など、セルフケアに関しては、まだ守られていない部分も多い。専門家の長期のフォローも含めて、みんなでシステムとして考えていきたい。 第2部では、教師の生徒の共同エージェンシー、学校は誰のためのものなのかに関して共有。生徒と先生がお互いに信用しあう関係の大切さがルーマニアと日本の参加者から報告されました。 アンケートでは、下記の様に様々なチャレンジに向かって行動されています。 ・身近な教育環境で改善するべき箇所がないか常に意識をするようになった。（生徒・学生） ・この4月からカリキュラムオーバーロードの課題に対し、現在の日本の中等教育の法的枠組みの中で、どこまで弾力的かつ即時的に解決に導けるかへの挑戦を始めました。（教師）	オンライン	日本語	中間まとめ実行委員会・2040年の日本と教育をデザインする国際共創プロジェクト実行委員会	

				参加者109名 (中高生2、大学生10、教師44、研究者・省庁・ 企業等53)				

Focus Group(FG)の説明：Focus Group(FG)はOECD Future of Education and Skills 2030/2040が組織する属性ごとのグループで、日本でもそれに倣い、下記のグループを構成して活動しています。

- FG1：教育行政に関わるメンバーのグループ（政府、自治体、教育委員会など）
- FG2A：教師グループ、FG2B：研究者、企業、NPOなど社会パートナーグループ、FG2C：教師を目指す学生・院生グループ
- FG3：生徒グループ（OECD生徒部会日本支部（Flying pEnguins））

別紙2：共創パートナーの皆様

共創参画くださったご登壇者・司会者の皆様（所属は2026年3月末時点）

生徒・学生

- 大岩楓 さん　石川県立輪島高等学校
- 大久保侑さん　石川県立輪島高等学校
- 崖顕さん　石川県立輪島高等学校
- 宮腰花歩さん　石川県立輪島高等学校
- 西ことのさん　石川県立飯田高等学校
- 出村莉瑚さん　石川県立飯田高等学校
- 三ッ川宗翔 さん　鳴門教育大学セルフデザイン学生サークル「RoundTable of Education」代表
- 大橋未来さん　鳴門教育大学セルフデザイン学生サークル「RoundTable of Education」副代表、FG2C：教師を目指す学生・院生グループメンバー
- 中川朋也さん　鳴門教育大学セルフデザイン学生サークル「RoundTable of Education」
- 中村賢治 さん　広島大学大学院 人文社会科学研究科）
- Evelina Cretuさん　National College ”Grigore Moisil（ルーマニア）
- 川口はるひさん　石川県立輪島高等学校

教師

- 平野 敏さん　石川県立輪島高等学校校長
- 岡本 夕佳さん　石川県立輪島高等学校
- 竹田悠月さん　石川県立飯田高等学校
- 清水良輔さん　石川県立飯田高等学校
- Alexandra Dragomirescuさん　National College ”Grigore Moisil（ルーマニア）
- 大達　雄さん　泉大津市立小津中学校
- 荒　康義さん　福島県立郡山高等学校
- 小澤　恵子さん　福島県立郡山高等学校
- Elizabeth Morleyさん トロント大学附属学校園名誉校長（カナダ）
- 上田　凜太郎さん　筑波大学附属坂戸高等学校
- 片山　康宏さん　兵庫県姫路市立中寺小学校
- 窪田　正義さん　兵庫県姫路市立荒川小学校
- 相田　康弘さん　山口県下関市立長府中学校校長

研究者

- 三井　知代さん　神戸親和大学 教授
- 藤原 伸彦さん　鳴門教育大学 教授
- 阪東　哲也さん　鳴門教育大学 准教授
- 豊田　英嗣さん　立教大学　大学教育支開発支援センター助教
- 加納 圭さん　滋賀大学 教授
- 秋田 喜代美さん　学習院大学 教授／中央教育審議会委員
- 西村 圭一 さん　東京学芸大学大学院　教授
- 藤村 祐子さん　東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構　准教授
- 三浦 浩喜さん　福島大学学長/OECD東北スクール総括
- 中西 美裕さん　大阪大学大学院博士後期課程
- 林 大介さん　東洋大学准教授

ソーシャルパートナー他

- 中野 謙作さん　一般社団法人栃木県若年者支援機構 代表理事・高根沢町教育委員会教育委員
- 伊熊 公一さん　元内閣府「子供と家族・若者応援団表彰」等 選考委員会委員）
- 森年 雅子さん　NPO法人manbo-de理事長
- 今木 とも子さん　NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい）
- 松田 香林さん　認定NPO法人Living in Peace
- 植竹 智央さん　For Everyone Study 代表

行政・自治体

- 大野 彰子さん　国立教育政策研究所 所長特別補佐
- 佐藤 悠樹さん　OECD日本政府代表部 一等書記官
- 眞家 夢乃さん　島根県津和野町 幼児教育コーディネーター
- 塩津 昭弘さん　熊本市教育委員会・元教育次長
- 中森 慶さん　文部科学省[兵庫県からの派遣]/学校支援チーム/元EARTH事務局
- 加藤 聡さん　姫路市総合教育監
- 貴志 純一さん　釧路町教育委員会社会教育主事
- 大山 宏さん　こども家庭庁成育局成育環境課居場所づくり推進官

壁のないあそび場「座」:

- Flying pEnguins座(FG3生徒部会）
- 学校のコンパスを創ろう
- 座・プラタナスカレッジ～先生になりたい学生のひろば～（FG2C教師を目指す学生・院生グループ）
- 教員研修で『元気玉』を届けようプロジェクト
- こども・若者の居場所づくり 座
- さんすう数学あそび座

団体/組織

- 特定非営利法人学校支援協議会
- 東京学芸大学高校探究プロジェクト
- 国際付属学校協会IALS(The International Association of Laboratory Schools)
- MIT App Inventor Foundation
- 株式会社IRODORI
- 北陸SDGs研究所
- For Everyone Study

協賛パートナー:

- 笹川日仏財団（輪島高校、飯田高校のパリ渡航支援）
- さくらサイエンスプログラム（トルコ生徒教師の渡航費キャンセルフィー）
- 株式会社内田洋行（生徒・学生の旅費支援）
- 栄光ゼミナール、SAPIX、早稲田アカデミー（さんすう数学あそび座）

2040年の日本と教育をデザインする国際共創プロジェクト実行委員会

- 竹内 陽渚さんFlying pEnguins座、広島市立大学
- Bunnyさん　Flying pEnguins座、大学生
- 竹内 舞さん　Flying pEnguins座、専修大学
- 寺尾 怜生さん　Flying pEnguins座、福井県立大学
- 木下 茉鞠さん　Flying pEnguins座、北海道夕張高等学校
- 藤原 照恭さん　青楓館高等学院 学院長

- 佐藤　雄太さん　　一般社団法人 教育AI活用協会 代表理事
- 里見　拓也さん　　University of Jyväskylä、大阪市立佃中学校
- 三浦　一郎さん　　姫路市立花田小学校

*Flying pEnguinsは、学校の壁を越えた生徒コミュニティで、生徒部会の日本グループ名（座名）です。

主催・事務局

- 田熊　美保　　OECD教育スキル局 シニア政策アナリスト
- Juan David OSSES　　OECD教育スキル局 政策アナリスト
- 荻上　健太郎　　東京学芸大学　日本OECD共同研究プロジェクトマネジャー
- 太田　環　　東京学芸大学　日本OECD共同研究プロジェクトメンバー
- 池邉　愛　　東京学芸大学　日本OECD共同研究プロジェクトメンバー
- 宮坂　修平　　東京学芸大学　日本OECD共同研究プロジェクトメンバー

【お問い合わせ】東京学芸大学国際共創プロジェクト運営事務局
Email: collective@u-gakugei.ac.jp